

EFL/ESL リーディング教材に表れた discourse marker の分析

— 談話構造意識化をねらって —

深 沢 清 治

学校教育学部

1. はじめに

リーディング指導過程において、語・句・文レベルを越えた談話レベルでの指導の重要性が指摘されている。コミュニケーションにおいて言語としての正確さ、および社会的適切さのみならず、cohesion/coherence に代表される文と文とのつながりに注目し、連続する文を前後関係に注意しながら理解できる談話能力は、コミュニケーション能力の重要な部分である。特に、リーディング指導においては、文と文とのつながり、談話構造を認識させることが重要である。そこで、本論は中級レベルの英語学習者のためのリーディング教材において、談話に対する意識化を進める支援の工夫がどのようになされているのかを検討することを目的としている。そのための手段として、教材中の文と文、あるいはパラグラフ間のつながりを示す discourse marker の役割に注目し、その使用について海外の ESL 教材と、日本の高等学校で使用されている英語リーディング教科書においてどのような特徴がみられるかを比較分析する。

2. Discourse marker の役割

(1) Discourse marker とは

Discourse marker (以降 DM と省略) とは、接続詞、副詞、前置詞など主として文法範疇に入る語彙表現であり、次の文のゴチック部分のような表現を指す。

- 1) A: I like him. B: **So**, you think you'll ask him out then.
- 2) John can't go. **And** Mary can't go either.
- 3) Will you go? **Furthermore**, will you represent the class there?
- 4) Sue left very late. **But** she arrived on time.
- 5) I think it will fly. **After all**, we built it right.

Fraser (1999: 931)

DM が言語学的研究の対象となったのは近年であり、たとえば Levinson (1983) においては研究対象としての有意さを指摘するに留まっている。

“... there are many words and phrases in English, and no doubt most languages, that indicate the relationship between an utterance and the prior discourse. Examples are utterance-initial usages of *but, therefore, in conclusion, to the contrary, still, however, anyway, well, besides, actually, all in all, so, after all* and so on. It is generally conceded that such words have at least a component of meaning that resists truth-conditional treatment. . . what they seem to do is indicate, often in very complex ways, just how the utterance that contains them is a response to, or a continuation of, some portion of the prior discourse.” (Levinson 1983: 87-88)

このほかにも様々な名称が与えられており、Fraser (1999) は隣接する discourse segment を結合する表現という以上に、その定義や機能については合意をみていないとしながら、discourse connective, discourse operator, pragmatic connective, sentence connective, cue phrase などの名称を列挙している。

(2) DM の種類と機能

文レベルを超えた英語教育の流れにおいて、発言と発言を結びつける「つなぎ語」については、これまでその語の持つ意味・ニュアンス・用法の説明などは文法指導と語彙指導の狭間で焦点が当てられることは少なかったように思われる。近年、こうしたつなぎ語を組織的に扱った辞書も現れ、詳細かつ網羅的なつなぎ語の区分としてたとえば Ball (1986) は次の24のカテゴリーを設定している。

Adverbials	naturally, obviously, certainly, surely, really
Amplification	moreover, what is more, furthermore, besides, I mean
Apposition	so to speak, for instance, that is, namely, in other words
Clarification	you know what I mean? I mean, if you see/know what I mean
Concession	after all, at that time, however, anyway, even so, in any case
Confidentiality	you know, you see
Consequence	accordingly, as a result, for that reason, in consequence
Continuation	anyway, now
Contradiction	actually, in fact, on the contrary
Contrast	on the one/other hand, instead
Corroboration	as a matter of fact, of course, for that matter
Digression	by the way, incidentally
Disagreement	so what?
Enumeration	firstly, last
Hypothesis	suppose, as if
Inference	in other words, otherwise, in that case
Limitation	at least, at any rate
Modification	more or less, by and large, on the whole, somehow
Precaution	in case, just in case
Reference	with regard to, as for, talking of/about
Suggestion	suppose, say, let us say
Summing up	to sum up, in short, in brief, summing up
Suppression	needless to say, not to mention, and so on and so forth
Transition	now, well, well now

このほかにも、スノードン (1990) や松本 (1992) のようなリンクワード辞典もさらに多様な用例と解説を示している。

その機能として、DM はリスニング、リーディングにおいて内容理解を補助する働きを持つ。これを実証しようとした研究として、Chaudron and Richards (1986) は、ESL 学習者を対象に、大学での講義を聞いて理解する際に DM がどのように理解を支援するかを研究している。彼ら

の研究においては DM を Micro marker と Macro marker との 2 種類に分類し、前者はリスニングにおいてはポーズを埋めて聞き手が談話の部分的理解のための時間を与えボトムアップ処理を助けるためのシグナルであるとして、代表的な例とともに以下の 5 種類に下位分類している。

- temporal links (時間順を表す) – then, and, now, after this, at that time
- causal links (因果関係を表す) – because, so
- contrastive relationships (対比関係を表す) – but, on the other hand
- relative emphasis (強調を表す) – you see, unbelievably, of course, actually, in fact,
- framing/segmentation (話題の切れ目を表す) – well, OK, all right?

これに対して、後者は ‘what I’m going to talk about today...’ のように、講義を聞き取る際の主な内容上の転換点や強調点などを示すもので、トップダウン処理を助けるシグナルとなるものである。Macro marker の例として、彼らは以下のような表現を列挙している。

- That/this is why...
- To begin with...
- The next thing was...
- This means that...
- One of the problems was... (以下略)

このような DM の違いが講義の理解に与える影響について異なる条件で聞き取りを行った結果、macro marker を含んだ講義リスニングのほうが micro marker を含むものよりも内容想起においてより効果的であったと指摘している。

また、DM の使用はリスニングをより理解しやすくするために話し手が用いる簡略化方略の表れとも考えられる。聞き手の理解能力が不足している場合、教師は何らかのパラフレーズを行う必要があり、英語母語話者と英語非母語話者による簡略化過程にみられる DM の使用の観点から比較検討した Fukazawa (1995) は、その結果を次のようにまとめている。まず、簡略化しようとする場合、より平易な単語に言い換えたり、1 文あたりの長さを短くしたりすることに加えて、英語母語話者、英語非母語話者いずれの発話にも DM、特に ‘and’, ‘and then’, ‘but’ などの micro marker の使用が増えてくる。ただし、英語母語話者の発話には micro marker に加えて全体の内容の展開を示す macro marker も出てくるが、中学校英語教科書の本文を英語で口頭導入しようとした英語非母語話者 (教師) の発話には micro marker のみしか表れなかったとしている。教室で使用できる既習語彙・表現に限度がある場合には、DM の使用も制限されることが考えられる。

リスニングと同様に、リーディングにおいても DM は読み手が文脈関係やトピックの流れや強調点を理解する際の手がかりとなる連接辞であり、その効果的な利用は学習者のリーディング・ストラテジーとしての役割を持つ。リーディングにおいて、未知語や複雑かつ曖昧な文の理解を進める手だてとして Grellet (1981: 15-16) は、テキストの cohesion をつくる工夫、すなわちつなぎ語に気づかせることの重要性を指摘している。入門期からリーディングにおいてトピックの流れや論旨の展開に関するつなぎ語を見つける訓練を行うべきであると主張し、その練習活動として以下の 3 つを提唱している。

- 1) つなぎ語の機能を認識したり、類語を探す訓練

- 2) つなぎ語を削除した文章を、つなぎ語を補いながら完成させる活動
- 3) 文をつなげたり、つなぎ語を足すことにより、一連の文を意味の通る文章に変える活動

(3)リーディング教材におけるDMの役割

従来のリーディング教材においては、これまでに述べたDMは語彙範疇として、すなわち接続詞、副詞、前置詞として扱われることが多かった。あるいは、読解過程において文単位の和訳中心の授業では、たとえば‘in fact’は「実際に」と訳出されるのに留まり、その果たす機能について適切な説明を得ることは少なかった。その理由として、DMが多くの場合、既習語であり、しかも接続詞のように機能語であることから、文法の重要項目としては強調されるけれども、文の連結という重要な機能を果たす接続副詞としては副詞の項目でも指導上あまり重視されてこなかったことが考えられる。

リーディング教材中のDMは、第1には読み手の読解を助ける機能を持つ。つまり、パラグラフなどで文中に含まれるDMは、心理的推測ゲームとしてのリーディングにおいて、未知語の推測や論旨の理解を検証しながらガイドする役割を持つ。第2に、指導上のメリットとして、読み手にDMの重要性を意識させることでテキストと読み手の相互作用のプロセスでの支援となり、さらに自立的リーディングを行う際に必要なリーディング・ストラテジーの訓練ともなる。それでは、現行のリーディング教材には文レベルを越えたリーディングを支援するためのDMがどの程度、盛り込まれているのであろうか。今後のリーディング指導のため、あるいは教材選択のために、ある程度の語彙数を含むと思われる中級以上の教材を対象としてDMの使用に関する分析を行う必要がある。

3. ESL/EFLリーディング教材に表れたDMの分析

(1)分析材料

分析材料としての教科書は、ESL教材を1種、およびEFL教材として日本で使用されている総合英語を目的とした高等学校英語Iの中から4種類を選定した。前者は、リーディングを主眼として、vocabulary, idiom, 内容把握, summary等を網羅した、いわゆる総合教材で、テキストを読ませる際に、チャート、グラフ、イラスト、写真などあらゆる情報を援用して、学習者の背景知識(schema)を活性化させ、大意把握を中心とした内容理解、さらに文章全体の構成(アウトライン)を意識させながら要点をまとめる演習へと段階を踏んで発展させている(「はしがき」より)。

一方、後者のEFL教材は同じくリーディングを主眼としながら文法、語彙、イディオム、条件作文などを含んだ日本の高等学校1年生用の総合教材で、37種類(1996年発行)の教科書から特に普及度の高いものを選択して、分析対象とした。選択教材は次の通りである。

ESL *Insights for Today*. (A High Beginning Reading Skills Text) Newbury House/ Heinle & Heinle, 1993.

EFL *Milestone English Course I*. 啓林館書店, 1996.

Powwow English Course I. 大修館書店, 1996.

Spectrum English Course I. 桐原書店, 1996.

Unicorn English Course I. 文英堂出版, 1996. (アルファベット順)

(2)方法

分析方法として、第1に総語彙数とDMの出現頻度をみることにした。そこで、対象とした教科書の本文部分(12~13章)の中から今回の分析では最初の5章(レッスン)の本文を分析対象とし、総語数を得るとともに、その中に含まれたDMを抽出し、総語数とDMの頻度の比較を行った。第2には抽出されたDMの分布を調査するために、集計されたDMを先述した Chaudron and Richards (1986) の5つのカテゴリーに従って分類・集計を行った(分析したESL教材の本文とその中から抽出されたDMはAppendixを参照のこと)。

(3)結果と考察

まず、5種類の教科書の語彙数とDMの出現頻度の関係をみたのが次の表1である。各課(レッスン)平均語数は、総語数を課(レッスン)数の5で割ったものである。なお、教科書名は総語数の多い順に並べられている。

表1 教科書の語彙数とDMの出現頻度

教科書名	総語彙数	各課平均語数	DMの出現頻度
TBK-A	2557	511.4	29
TBK-B	2346	469.2	22
TBK-C	2280	456	28
TBK-D	2015	403	50
TBK-E	1566	313.2	24

さらに、各教科書別のDMの頻度をカテゴリー別に集計し、その分布をみたのが次表2である。

表2 教科書別DM頻度表

	Seg	Tem	Cau	Con	Emp	Total
TBK-A	2	12	7	6	4	29
TBK-B	0	8	4	8	2	22
TBK-C	2	5	4	14	3	28
TBK-D	0	7	11	15	17	50
TBK-E	4	7	4	7	2	24
Total	8	39	30	50	28	153

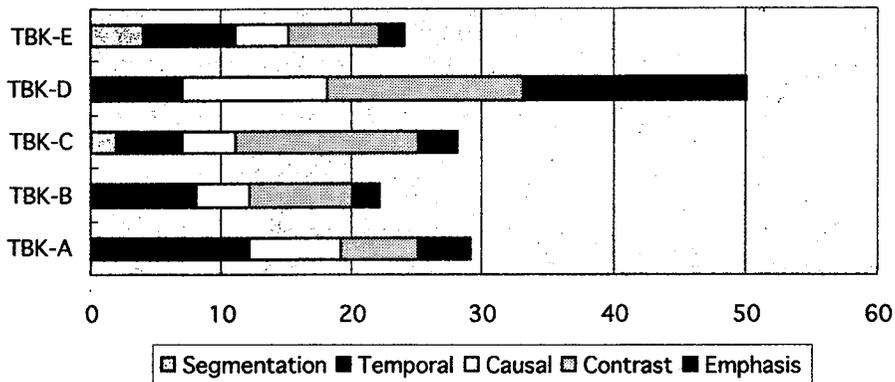


図1 カテゴリー別のDM出現頻度表

上の表1から次のことが言えるであろう。まず第1に、本稿で分析したESL/EFL教材についての調査結果からみれば、DMの出現頻度はESL教材(D教科書)が50例なのに対して、他のEFL教材では22~29例、平均すれば25.8例で、ESL教材には約2倍の数のDMが盛り込まれているのがわかる。また、一般的には語彙数とDMの出現頻度は比例すると思われるが、分析教科書に限って言えば、必ずしもそれは当てはまらない。たとえば、総語彙数が全体で第2位(2,346語)のB教科書が、第5位のE教科書(1,566語)よりもDMの使用頻度が低くなっているのがわかる。全体としては、今回分析を行ったESL教科書の方が文と文、あるいはパラグラフ間のつながりをより滑らかにして、理解を易しくしているものと思われる。

また、各課(レッスン)毎のDMの使用頻度を調査してみると、教科書間で大きなばらつきがみられる。特に各教科書の最初の課において、TXT-D(ESL教材)ではDMが9個含まれるのに対して、TXT-Aの6個を除いて、その他のEFL教科書ではそれぞれ0, 1, 2個の最低限の使用しかみられず、教科書使用開始段階でDMを意識化させようとするリーディング指導への手がかりの提示が希薄であることを示している。

続いて、表2および図1に示されるように、DMの種類別にみればEFL教材が時間系列(temporal)あるいは対比関係(contrast)に傾斜している(両方で全体の68%)のに対し、一方、ESL教材では強調(emphasis)を中心としてsegmentationを除く4つの種類がほぼ均等にバランスよく表れているのがわかる。各教材ごとの総語彙数が異なるため、頻度数のみから相対的な判断を下すことは困難であるが、日本の高等学校英語I教科書の一つの特徴と位置づけることができるであろう。

さらに、個々のDMをそれぞれのカテゴリ内での出現頻度でみていくと、実際に使用されているもののうち、2回以上使われているつなぎ語は次のようなものである。(ただし、segmentationについては使用範囲が限定されているため、除外した。)

ESL教材に頻出したDMの例

Temporal	Causal	Contrast	Emphasis
finally 3	because 7	but 7	in fact 5
	so 2	however 7	for example 4
			naturally 2

EFL教材に頻出したDMの例(4教科書の合計)

Temporal	Causal	Contrast	Emphasis
then 13	because 7	but 26	for example 3
and 7	so 7	however 6	moreover 2
soon 5			of course 2
after that 3			

()内の数字は出現回数

この結果から、前述した時間系列と対比関係への集中が裏付けされる。日本の高校教科書に多くみられるDMの代表的なものは'and', 'so', 'then', 'but'などであるのがわかる。これに対して、ESL教材では、明らかに多くの強調や因果関係を表すDMが頻出しているのがわかる。これは談話構造の中での文と文の関係、あるいはパラグラフ間の関係をより明確にしてくれるものであり、リーディングにおいて談話構造への意識化を図ることをより効果的に支援するものであると考えられる。

(4)今後の教材開発への示唆

以上の調査結果から、次の2点を指摘したい。第1に、今回の分析対象となった教科書に限定すればEFL教材の特徴として、ESL教材と比較してDMの使用が相対的に少ないことがわかった。文レベルを越えた指導を実践するためにも、特に中級レベルの教材ではこのような補助は必要であろう。第2には、導入されたDMの機能別分類をしてみると、その機能がtemporalおよびcontrastに限定されているのがみられた。パラグラフ・リーディングを実践するためにも、より明確で多様な文と文との関係を提示していることが教材に求められるであろう。

当然ながら、EFL教材の作成においては、使用語彙、文法事項の選択・配列に大きな制約を課せられている。たとえば、内容の展開をより具体的に示すとしても、数語におよぶDM、特にmacro markerを多用することは不可能である。しかしながら、特に、英語非母語話者の教師にとって、リーディング指導で自らこれらを考え出すことは大きな負担となる。これを補完するものとして、教科書の本文の直後に置かれることの多いサマリーを兼ねた空所完成形式の読解問題を工夫することができる。実際、本研究で使用したESL教材にはDMを入れる空所完成問題やDMの機能を正しく説明する文を選択させる問題が取り入れられていた。これに対し、日本の高校英語教科書の同種の問題は、ほとんどが内容語を補って本文の概要をまとめさせる問題であった。教科書の本文中だけでなく、その他の部分でもDMについて説明したり、考えさせることは十分可能であろう。

4. 結論

本研究においてはDMの観点からEFL/ESL教材の特徴をみてきた。ただし、ここでそれぞれの教材の特徴を総花的に述べることは控えなければならない。まず、本小論の調査対象は非常に限定されたものであり、今後、より広い範囲の教材を調査対象として分析を進めていく必要がある。残念ながら、今回使用したESL教材には使用語彙レベルは明記されておらず、厳密な意味での比較教材研究はできない。今後、語彙レベルなどをそろえた比較研究で、今回わずかにみられたEFL/ESL教材の特徴をより詳しく分析していきたい。

また、本論では、各教科書内の題材には言及しなかった。つまり、DMの使用はたとえば使用題材のジャンルやトピック、さらには文のスタイル(論説文、説明文、小説など)によっても異なるため、すべての教材が同様にDMを取り入れることは現実的ではない。特に、使用語彙数が制限されたEFL教材においては困難であろう。さらに、DMの使用を単に量的な視点からのみ勧めることはできない。たとえば、Chaudron and Richards (1986)が指摘するように、micro markerが多すぎるとかえって内容理解において注意を散漫にさせる可能性があることや、教材改作に際して恣意的に追加することにより、原文の持つ勢いを単調で無味乾燥なものにしてしまう危険性ははらんでいるからである。

しかしながら、リーディング指導において談話の流れを読み手に理解しやすくする手がかりとして、DMをさらに多く取り入れることで、リーディング指導にも好影響を与えるものとおもわれる。また、量的な充実のみでなく質的な取り組みとして、リーディング指導においてより多くの種類のDMを取り込んでおけば、指導上の手がかりにもなる。従来の教材にみられるtemporal/contrastの機能を持ったDMは文と文、あるいはパラグラフ間で等位的に結ぶDMであるのに対して、causal/emphasisは前後関係における強弱関係を示すものである。より重みをつけたリーディング指導を行うために、また、こうした談話構造へのアウェアネスを促すためにも、

DM の観点を付加したこれからの教材開発に期待されることは大きいと言えるであろう。

Appendix

Elephants: Gentle Giants of the Earth

They live with their mothers, sisters, aunts, nieces and nephews, and an old grandmother, who is the head of the family. They show emotions such as joy, sorrow, anger, patience, and friendliness. They become excited when they meet old friends. Who are these people? They are not people; they are elephants!

Elephants are the largest land animals on Earth. An adult male African elephant can weigh six tons and be 12 feet tall. Females weigh about half as much as males, and are about four feet shorter than males. A newborn elephant, called a calf, weighs about 260 pounds (260 lb) and stands about three feet tall. Elephants usually have two tusks. These are long, pointed teeth that extend from the elephant's mouth. An elephant's tusks grow all through its life, and an elephant may live 60 years or more. The tusks of an old male may reach nine feet in length. Elephants only use their tusks for protection. They do not use them to kill, **because** elephants are vegetarians; **that is**, they do not eat any meat. They only eat plants.

Elephants are the giants of the animal kingdom, **but** their size is not their only uncommon feature. The most unusual characteristic of an elephant is its trunk. An elephant uses it to smell, wash, eat, drink, "talk" and hug. **However**, elephant babies do not know how to use their trunks just as human babies are not born with the ability to walk. Learning to walk is not easy, and it takes a lot of practice. **In the same way** baby elephants also learn how to use their trunks well.

Over the last 20 years, people have studied elephants and how they live. **Consequently**, we are beginning to understand these fascinating giant creatures. **Unfortunately**, their numbers are quickly decreasing. People are killing elephants to make money by selling their tusks. An elephant's tusks are made of ivory. People use ivory to make bracelets, rings, and other ornaments. Illegal hunters are killing many elephants for their valuable ivory. In 1975, there were about 1.5 million African elephants. Now there are fewer than 600,000. **As a result**, people are worried that they may become extinct. Some countries are trying to stop the killing of so many elephants. They are making laws to protect elephants.

Many people travel to Africa to see its beautiful countryside and its unusual animals. **In fact**, tourism is important to the economy of many African countries. Elephants are a part of the tourist attraction. With cooperation among countries around the world, elephants may continue to live, so that everyone can see these fascinating giants of the Earth. (*Insights for Today*, pp. 3-4)

References

- スノードン, P. (著) 山本雅三 (訳) 1990. 『英語リンクワード活用事典』北星堂書店.
松本茂 (編) 1992. 『英語ドンピシャつなぎ表現』SS コミュニケーションズ.
Ball, W. 1986. *Dictionary of Link Words in English Discourse*. Macmillan Language House.

- Brown, G. and G. Yule 1983. *Discourse Analysis*. Cambridge University Press.
- Chaudron, C. and J. Richards 1986. The effect of discourse markers on the comprehension of lectures. *Applied Linguistics*, 7, 2, 113-127.
- Fraser, B. 1999. What are discourse markers? *Journal of Pragmatics*, 31, 931-952.
- Fukazawa, S. 1995. A study of simplification strategies at the discourse level by native and non-native speakers of English: their use of discourse markers. *Hiroshima Journal of School Education*, Vol. 1, 65-73.
- Grellet, F. 1981. *Developing Reading Skills*. Cambridge University Press.
- Levinson, S. 1983. *Pragmatics*. Cambridge University Press.

Abstract

**An Analysis of Discourse Markers in EFL/ESL Reading Materials:
Raising Discourse Awareness**

Seiji FUKAZAWA

The present article is an attempt to analyze some currently available EFL/ESL reading materials in terms of their use of discourse markers. Traditional second/foreign language reading has concentrated on the sentence and units smaller than the sentences. But, recent research into SL/FL reading and discourse analysis has empirically proven that text is not a series of independent units; if reading is to be efficient, the structure of longer units such as paragraphs or discourse within text must be understood. In order to facilitate the reading process, we need to prepare students not only to pay attention to the significance of discourse but also to recognize the various devices used to create textual cohesion and more especially the use of reference and linking-words. Among the many devices connecting ideas in a text are discourse markers, which signal the information structure of the discourse. Simple recognition of the inter- or intra-sentential connectors will help learners to understand the development of ideas and propositions in the passage. For these reasons, the present short article aims 1) to study how discourse markers facilitate reading comprehension, 2) to analyze discourse markers used in some intermediate EFL/ESL textbooks, and 3) to explore the implication for reading material design to raise a discourse awareness of EFL learners.